

# 芭蕉の「からび」

復 本 一 郎

小稿は、芭蕉の美に、従来看過されてきた「からび」を加える試みの為のノートである。

元來、混本寺佛頂和尚に嗣法して、ひとり開禪の法師といはれ、一氣鐵鑪<sup>ナカ</sup>生いきはひなりけれども、老身くづはるゝまゝに、句毎のからびたる姿までも、自然に山家集の骨髓を得られたる有がたくや。

其角編『枯尾花』（元禄七年刊）の巻頭に其角自ら筆を執つて掲げた「芭蕉翁終焉記」の一節。其角によって評価された芭蕉の「からび」である。この一節を考えるにあたって、其角に於ける「からび」の意味内容を観ておくことにする。

其角は、自ら編した『いつを昔』（元禄三年刊）に

遊園城寺

からびたる三井の二王や冬木立

其角

の一句を寄せている。「からび」は、「二王」の「からび」であるとともに、「冬木立」の「からび」でもある。「冬木立」の「から

び」は、『芭蕉庵小文庫』（元禄九年刊）中の八新麥はわざとすゝめぬ首途かなVの山店の句を発句とする元禄七年成立の芭蕉・山店両吟歌仙中の山店の付句八からびたる櫟林に日がくれてVが参考になる。「二王」の「からび」については、蕉門句空の滑稽の一句八夏瘦をするか仁王のあはら骨V（『干綱集』宝永元年刊所収）が、滑稽故に参考となる。肋骨<sup>けらほね</sup>を露にした姿で屹立している「二王」の態を、其角は「冬木立」の中で「からび」と把握したのである。「句兄弟」（元禄七年八月五日序）十二番には次の判詞が見える。

兄

杜国

馬はぬれ牛は夕日の北しぐれ

弟

柴はぬれて牛はさながら時雨哉

此二句はからびを云とりし迄にて、類案多く聞え侍れども、馬とく進み牛緩く歩みて斜陽のこれり、と見し風景と、柴のしづくのおもく成て牛はさながら時雨をしらせたるあゆみとぞ、とけしきづき侍る也。句の面に兄弟たしか

成べし。

両句の句意は判詞に尽くされている。其角の「此二句はからびを云とりし迄にて」との言は、両句が素材としたところの「時雨」の情趣（紹巴『至寶抄』に「時雨の本意として、一通降かとすれば晴、霽るかと思へば又降りなどして日影ながらにむら／＼時雨、冴え／＼し月の行末に思はざる一時雨板屋の軒、篠の庵など音あらましき體仕來候」とある）に対して言われたものである。

以上の二例は、芭蕉生前に於てなされた発言。『末若葉』（其角編・元禄十年刊）にも其角の「からび」への発言が見られる。

夕つかた寺のうしろなる畠へ出たれば、いと覺束なきんめのはずゑにかゝりて、からびたるもの有。よりてみれば、蛙の六分ばかりなるが、足手は糸のやうにて、腰つらぬいてかれり。是こそ正しう鵲の草茎也。

草茎をつゝむ葉もなき雪間哉

其角

其角の目に映じた「蛙」の「からび」は、『万葉集』ハハルサレバモズノクサグキミエ子ドモワレハミヤラムキミガアタリハ（1897）以来の歌語「鵲の草茎」と把えることによつて、確実に美たり得ている。これ等其角の用例をもつてすれば、「からび」とは、「枯凋」或は「枯凋」に繋がる現象、の中に求められた美であると言えよう。かかる其角の「からび」を参考にしつつ、先の「芭蕉翁終焉記」中の其角の評価になる芭蕉の「からび」を考へることにする。

其角は、芭蕉の「句毎のからびたる姿」を、「老身くづはるゝまゝに」（芭蕉「閉關之説」（元禄六年秋）中に「はじめの老の來

れる事、一夜の夢のごとし。五十年、六十年のよはひかたよく、あさましくづをれて」とある）、「自然に山家集の骨髓を得られたる」と説明を加えている。問題は、芭蕉と『山家集』とのかわりである。波静本『野ざらし紀行』（定稿型と考えられている）に附されている素堂の序に次の一節を見る。

此翁年ごろ山家集をしたひて、をのづから粉骨のさも似たるをもつて、とりわき心とまりぬ。

芭蕉が『山家集』を座右の書としていたことを明かしている。其角は、芭蕉と『山家集』とのかわりを「自然に」と表現したが、素堂も「をのづから粉骨のさも似たる」と記している。そのかわりは、「自然に」であり、「をのづから」であった。『陸奥衛』（桃隣編・元禄十年刊）には、同じく素堂の次の如き句文が見える。

亡友芭蕉居士、近來山家集の風脉をしたはれければ、追悼

に此集を誦誦するものならず。

素堂

あはれさやしぐるゝ比の山家集

この句文は、「自然に」であり、「をのづから」である芭蕉と『山家集』とのかわりを、具体的に伝えるものとして注目される。一句に於ける「しぐるゝ比の山家集」の「しぐるゝ比」は、一句の季（冬）を示すとともに、『山家集』に於ける「しぐるゝ比」でもあろう。すなわち、一句は、『山家集』上巻冬の部への芭蕉の傾倒を指摘するものである（秋の部にも「時雨」の歌が載るので秋冬の部への傾倒とも考えられる）。同集中、上巻冬の部に収められている

山ざとはしぐれしころのさびしさにあらしのおとはやまさりけり

の一首が素堂の句の本歌。素堂は、芭蕉と『山家集』とのかわりを、「しぐるゝ比の山家集」に観たのであった。ちなみに、『山家集』冬の部に収められている

霜かづくかれの草のさびしきにつかは人のこころとむらむ

の一首からは、まさに「枯渇」の中に美を求める西行が髣髴とする。今一首、同じく冬の部に

はなにおくつゆにやどりしかげよりも枯野の月はあはれなりけり

が見える。先の一首よりも一層的確に「枯渇」の中に求められた美が詠じられている。

しかして、其角の言「句毎のからびたる姿までも、自然に山家集の骨髓を得られたる有がたくや。」の「山家集の骨髓」が、「しぐるゝ比の山家集」を指すことは、先の其角の「からび」の諸用例に徴して明らかである。かくて、芭蕉、「からび」、「山家集」、は其角の美の範疇できわめて直截的に繋ぐていくのである。

ここで、其角の「からび」に関連して、元禄八年正月廿九日付許六宛去来書簡の一節を引いておく。

凡古翁の御句、(中略)御句毎のさびてしほりの句たるを、日比年ごろ、有がたしとも、貴しとも存くらし候而、常には何とぞと心懸候。此事、拙者壹人ならず、其角をはじめとして、常に心懸られ候と相見え候。此度『枯尾花』にも、其角

その事も書候。

去来この言は、右に問題としてきた其角の「からび」についての発言を指してのものである。去来が、「さび」と「からび」を近似した美と把握していたことを知る。元禄七年九月跋の『或時集』(嵐雪編)中の「いかにして唐絵は月のからびたる」の氷花の一句が、『雪の薄』(眠郎編・安永六年刊)中の「他門の句ハ彩色のごとし。我門の句は墨絵のごとくにすべし。折にふれてハ、彩色なきにしもあらず。心、他門にかわりて、さびしほりを第一とす」の言(所謂八祖翁口訣)とともに参考となる。「唐絵」は、『田舎の句合』第三番の判詞(芭蕉)「左は唐繪、右は大和繪。墨繪にしやれて、色繪うるはし」が明らかにしているように、「色絵」の「大和絵」に対する「墨絵」である。雪門氷花の一句は、「墨絵」のもつ情趣を「からび」と表現したものである。ちなみに、『宗長百番連歌合』(永正五年六月成)の三十八番、牡丹花肖柏の判詞には「鳴や澤水、こほらぬ音、ともにからひさひけなり、持とかやに侍れかし」とある。「からび」が「さび」とともに語られている。両者が近似した美であることを明示するものであろう。

## 二

芭蕉と「からび」との関係(芭蕉に於ける「からび」の知的理解の様相)は、はやく延宝八年の嵐亭治助(嵐雪)の序を有する『田舎之句合』(其角の廿五番の目句合)の第十九番の芭蕉の判詞に窺うことが出来る。

左 農夫

時雨瘦姿私の物干にと書り

右勝 野人

風となりぬ蝸牛の空セ貝

『和歌三昧』に「蘆冬の哥は細くからびて」と云り。瘦姿の露もさびしく、蝸牛のうつせ貝もさびたり。されども、かれが角の上にあらずは、右いさゝかまさりなや。

ここで言う『和歌三昧』とは、建仁二年三月二十一日の『三體和歌』である。『日本歌学大系』所収本（竹柏園藏鎌倉時代古写本）では、引用箇所は、「秋・冬 此二は、からびほそくよむべし。」と記されており、右の判詞と少しく異なる。『日本歌学大系』の久曾神昇博士の解題によれば、久曾神蔵本『三體和歌』、長明『無名抄』の二が「ほそくからび」の由である。貞門の俳書『時勢粧』（維舟編・寛文十二年成）に、△歌の体やはそくからびて秋のせみ△の尾張名古屋の俳人不柄子一松なる者の一句が見える。「ほそくからび」の表現が流布していたことを知る。『三體和歌』が明らかにしているところは、「からび」が、「春・夏 此二は、ふとくおほきによむべし。」「戀・旅 此二は、ことに艶によむべし。」に対する「秋・冬」の美であるということである。芭蕉の判詞「瘦姿の露もさびしく、蝸牛のうつせ貝もさびたり」は、芭蕉が左右の句に觀た「からび」に他ならない（ここにも「からび」と「さび」とのかかわりが窺える）。『瘦姿の露』、蝸牛のうつせ貝、いずれも「枯凋」の中に求められた「からび」の美で

ある。先の其角の「からび」解釈は、ただしく、この『三體和歌』の「からび」に繋がっているのである。

元禄元年刊『續の原句合』（不卜編）の冬の部の判詞にも芭蕉と「からび」との関係が窺える。

左 氷柱

風に來て氷柱にさがる楓説

右勝

門閉て閑居をしゆる氷柱かな

翠風

氷柱にさがる楓、ほのかなるけしき、細くからびて哀なるに、右は、なを烟たえゝにして、むぐらの後は、つららに門をとぢたる閑居の扉、感情まさりたるやうに覺侍る。

冬の部の八番「細くからびて」は、無論、先の『田舎之句合』で芭蕉自身引用した『三體和歌』によるものであるが、ここでは芭蕉自らの評語として消化されている。「氷柱にさがる楓」の「からび」も、「瘦姿の露」「蝸牛のうつせ貝」同様、「枯凋」の中に求められた美である。同じ『續の原句合』秋の部の四番（鳥）の湖春の判詞にも評語としての「からび」が用いられていることを付言しておく。

左

谷風や風ふき登る鳶の色

蚊足

右勝

筏木につたなき鳶の命かな

扇雲

左、經信卿の、門田の稻葉おとづれて、とあふのきたる畫のさま、此作者の俳によそえられて床敷く侍るに、右の桴

木の蔦の命はそこからびて言ひなせる、三体の一つ、其体を得て目出度ければ勝と定むべし。

歌学の素養豊かな貞門の俳人湖春も、「桴木の蔦」に「枯凋」の中に求められた美を見出し、『三體和歌』に抛りながら、「からび」の判を下している。芭蕉が用いている「からび」と選庭がない。芭蕉の「からび」を、評語としての「からび」を通して探ることの限界をここに見ることが出来る。

### 三

再び門弟達の言説を斟酌しながら、芭蕉の「からび」を考えることにする。

「厂がねも静にきけばからびずや

酒しゐならふこの比の月

芭蕉

元禄元年九月中旬、深川芭蕉庵での越人・芭蕉阿吟歌仙の発句と脇である。発句は越人。芭蕉真蹟が残っている。『阿羅野』（荷兮編・元禄二年刊）所収。直前、芭蕉と越人は『更科紀行』の旅を終えている。越人の発句に関しては、幕末の俳諧研究家馬場錦江の『俳諧七部通旨』（嘉永五年成）に詳しい。

長明無名抄に云ふとく大きなうた細くからひたるうたえんにやさしき歌といふ事あり宵の間の月のかつらの薄もみちてるとしもなきはつ秋の空さひしさは猶残りけり跡たゆる落葉か上にけさははつ雪此二首細くからひたる歌とあり雁かねの嘈々となき渡る田家のかまひすしきにはあらて深川の幽棲に夜ふけ代かえる雁の聲さひしく覺束なき秋の空のしのはしき

感情十分なるべしされはしつかにきけはからひたるにあらずやといと心細かるへし

引用されている二歌は『三體和歌』中の長明の秋冬の歌。他に、『三體和歌』には、良経、慈円、定家、家隆、寂蓮が加わっている。錦江のこの言に明らかにされているように、越人・芭蕉の風雅の挨拶に於ては、「からび」が、単に対象の「枯凋」に求められた美ではなく、情の世界にまで瀾漫昇華されているのである。

「嘈々となき渡る」ところの「厂がね」を「深川の幽棲」で「静にきく」——その場を通してのその情趣が「からび」として把握されているのである。越人の発句は、深川芭蕉庵での「からび」の生活を楽しむ芭蕉への讃辞に他ならない。「からび」は、明確に芭蕉の美として伝えられているのである。「厂がね」に関しては、麦水の『貞享正風句解伝書』（明和七年成）中の

雁金と云て金玉の聲と聞くなれ共、此庵にて聞けば又からびたると也

との解が参考になる。脇句の「酒しゐならふ」は、「取持ちすることになれるの意」とする中村俊定先生説（日本古典文学大系『芭蕉句集』昭37・6）と、「酒を飲み習った」とする萩原蘿月氏説（日本古典全書『俳諧七部集』昭25・1）とがある。『更科紀行』には、「いでや月のあるじに酒振まはん」が見える。「鴈」と「月」は付合（『類船集』）。いずれにしても「枯凋」を主調とする「からび」の美に添えた打添付の脇句である。

又の旅は元禄二年のはじめの夏、深川のいほりも人にやり

て、なす野の原の郭公をまち、蓬葎の敷麻の下にきりぐすを聞て、千百余里の嶮難、終にかうべをしるふして、みのゝ國我さとにうつり給ふ。句どもあまた有。此事はおくのしほりにのこし給へば、大形はもらしつ

胡蝶にもならで秋ふる菜むし哉

たねは淋しき茄子一もと

かくからびたる吟聲ありて、我下の句を次

如行編『後の旅』（元禄八年刊）に見える。△胡蝶にも▽の発句が芭蕉、△たねは淋しき▽の脇句が如行である。『おくのほそ道』の行脚後、元禄二年八月下旬、大垣如行亭での吟。前文中「又の旅」は『おくのほそ道』の旅であり、「おくのしほり」が『おくのほそ道』であることは言うまでもない。如行が、芭蕉の発句に対して「からびたる吟聲」との評価をしているのが注目される。其角は、芭蕉の「からび」を、「老身くづはるゝまゝに」と説いた（前掲「芭蕉翁終焉記」参照）。如行も又、「終にかうべをしるふして、みのゝ國我さとにうつり給ふ」と記す。「からび」は、「老」とのかかわりの上に成り立っている美であると言えよう。無論、ストレートな肉体的「老」ではなく、肉体的「老」とともにある心意的「老」である。「からび」が、美である以上、「老」イコール「からび」ではなく、「老木に花」（『風姿花伝』）の如き様相を呈するものだからである。『心敬僧都庭訓』（兼載著・長享二年成）の「初心の時からひたるかたをこのむへからす候。（中略）をのつから年も老こうも入て後。からひたるはよし」との記載が想起される。「年も老こうも入て後」である。△胡蝶

にも▽の一句を考えよう。貞享元年成立の

花の咲みながら草の翁かな

秋にしほるゝ蝶のくつをれ

勝延  
蕉

の付合（稿本『野さらし紀行』所収）が参考になる。芭蕉の付句は、自らを「蝶のくつをれ」（秋の蝶）に譬えたものである。その芭蕉が、再び、今度は、自らを「胡蝶」になりそびれて秋を迎えた「菜むし」（紋白蝶の幼虫）に譬えている。「枯凋」の様相を示す対象をもつて自らを表現する傾向と、「からび」とは無関係ではあるまい。元禄四年には△ともかくもならでや雪のかれお花▽△雪の尾花△所収の句をものしている。「蝶のくつをれ」も「菜むし」も、或は「雪のかれお花」も、多分に逆説的な意味合を含んだ卑下（挨拶としての）に他ならない。俳諧の為に旅をし、俳諧の為に老いた芭蕉自身の「からび」である。その「からび」は、決して否定すべきものではなく、華麗な美とは対蹠的なところで、華麗な美とデリケート・バランスを保ちながら「からび」の美として一句へと結晶していく体のものである。それを評価しての、如行の「からびたる吟聲」であろう。如行の付句も、自らを「茄子」（種茄子）に譬えて、芭蕉の「からび」に応えたものである。

\*

横雲の影より。からびたる声して出来れり。げに老ぼれ足よはきものは。友どちらにもあゆみおくれて。ひとり今にやなりぬらんと。翁の。

「長嘯の墓もめぐるか鉢たゝき」と。聞え給ひけるは。

此あかつきの事にてぞ侍りける。

去來の「鉢扣ノ辞」(『本朝文選』所収)の一節である。「此あかつきの事」は、具体的には、元禄二年十二月二十五日。一句「いつを昔」其角編・元禄三年刊所収)の「長嘯」は、木下長嘯子。「長嘯の墓もめぐるか」の上中十二字は、長嘯子の墓の地理的關係(塚は小塩山、墓は高台寺)によつての描出でもあるうが、何よりも彼の歌文集『萃白集』に八はちたゞきVが収められていることが、大きく作用しているのであらう。そこには、「鉢たゞき」の「声」が「いつも冬になれば、さむき霜夜のあけがた、なにごとにかあらん、たかくのゝしりて大路をすぐる。かれが聲いとたへがたくめざめて、不圖聞つけたるは、卯の花のかげにくるゝこゝちす。」と記されている。これを踏まえての上中十二字である。しかして、「からびたる声」は、「声」に集約された「鉢たゞき」(『類船集』「霜月十三日に開闢して四十八夜の勤行大晦日に廻向するとそ。星不<sub>レ</sub>笠兮夜不<sub>レ</sub>箇東西南北自由身。瓢<sub>カ</sub>筆扣<sub>カ</sub>罷有<sub>二</sub>何益<sub>一</sub>花<sub>カ</sub>苑十<sub>一</sub>方<sub>カ</sub>淨<sub>一</sub>土<sub>カ</sub>春と一休和尚も讚美せられしなり。空也上人そはくの詠哥をもて無常をすゝめ念仏を修する行ぞかし)の「からび」である。去來が書留めている芭蕉の言「げに老ばれ足よはきものは。友<sub>カ</sub>どちにもあゆみおくれて。ひとり今にやなりぬらん」が、それを明らかにしている。「老ばれ」、「友どちにもあゆみおくれ」た「鉢たゞき」の様相は、「枯凋」を主調とする「からび」そのものである。芭蕉の「からび」が「鉢たゞき」の「からび」を見出だし、美に昇華していくのである。

\*

から鮭も空也の瘦も寒の内

此句、師のいはく「心の味をいひとらんと數日腸をしぼる」と也。ほね折たる句とみへ侍る也。

土芳の『赤雙紙』である。一句の成立は元禄三年冬。『猿蓑』(去來・凡兆編・元禄四年刊)所収。問題となるのは、土芳が引用している芭蕉の言「心の味」である。栗山理一先生はこれを「芭蕉自身の心」の「味」と解される(昭和四十五年度成城大学での御講義による)。尾形竹氏も近時この様なお考えを示された(『松尾芭蕉』昭46・3)。「赤雙紙」のこの一節の前条、八雲雀鳴中の拍子やきじの聲Vに対する「此句、ひばりの鳴つゝけたる中に、きじ折く鳴入る氣しきをいひて、長閑なる味を取らんと色くして是に究る」(傍点筆者)の記載をかんがみると、この考えは首肯されよう。すなわち、芭蕉自身の「心の味」のイメージ化が、「から鮭」(『和漢三才図絵』「作法采<sub>二</sub>生鮭<sub>一</sub>去<sub>レ</sub>腸投<sub>二</sub>屋上<sub>一</sub>」以<sub>レ</sub>曝<sub>二</sub>乾<sub>一</sub>)であり、「空也の瘦」であつたのである。そして、その「心の味」は支考が『俳諧古今抄』(享保十五年刊)に空也と空鮭は、枯木寒岩の観想ながら、空鮭には寒中の薬喰をよせ、空也には寒夜の修行をむすべる、寒中の二字はさらにして、瘦の一字は互照の格を称すべし。と説く如く「瘦」、すなわち「枯凋」を主調とする「からび」の「味」であつた(『三體和歌』の「からびはそく」は、『後鳥羽院御集』では「瘦體」、『秋篠月清集』では「瘦歌」となっている)。一句には次の詞書を有する真蹟が伝わる。

都に旅寝して鉢扣のあはれなるつとめを夜ごとに聞侍て

『續の原句合』に「氷柱にさがる楓、ほのかなるけしき、細くからびて哀なるに」(前掲)と見えたように、「からび」は「あはれ」と重なり合うものでもあった。東海吞吐の『芭蕉句解』(明和六年稿)に於ける

空也の瘦は鉢扣に対して成べし。乾鮭の干からびたる空也の瘦たる此吟のからび三ツいづれかおかしからざらんとの把握は的確である。

他に、『後の旅』中の嵐雪の一句

芭蕉翁懷舊卯月十二日

からひたる様なりけるを若楓

嵐雪

或は、『芭蕉庵小文庫』(史邦編・元禄九年刊)中の史邦の一句

……師のなつかしき折く、あるは月花に情おこる時は、是をかけこれをすえ(机・硯箱・檜笠・菅蓑・芭蕉自画像——筆者注)ひたすら生前のあらまじして句の味をうかぶのみ。む月七日は、ことにわか菜のあつものをすゝめて、

例よりもかなしく、かしこまる神になみだこぼれて折そふる梅のからびや粥はつを

に於ける「からび」も、各々の詞書をかながみると、芭蕉のイメージと重なり合った「からび」と思われる。

史邦

#### 四

以上、門弟達の言説を中心に芭蕉の「からび」を追って来た。

門弟達は、或は芭蕉の作品に、或は芭蕉の生活に、或は老いた芭蕉自身の心の中に、芭蕉の「からび」を見出だし、それを高く評

価した。「からび」は、たしかに芭蕉の美の一つとしてその位置を占めていたと言えるであろう。今一つ、

からびたるも、艶なるも、たくまじきも、はかなげなるも、おくの細みちみもて行に、おぼへずたちて手たゞき、伏て村肝を刻む。

をあげる。素龍筆『おくのはそ道』の、素龍による跋文の一節である。年記は元禄七年初夏。『おくのはそ道』への「からび」の評価である(無論、ここで「艶」の評価に注目すべきこというまでもない。「艶」とともにある「からび」である)。芭蕉所持本の跋文中に見える「からび」故、その意義は先の諸言説に比し、かなり大きい。芭蕉自身にとっても「からび」は、すすんで庶幾すべき美であったと考えてよいであろう。ただ、素龍が『おくのはそ道』中の奈辺をもつて「からび」の讃辭を送ったかは不明である。同紀行中

むざんやな甲の下のきりくす

の一句を見る。先の如行の『後の旅』には「蓬律の敷麻の下にきりくすを聞て」と記されていた。そして『心敬僧都庭訓』には「たゝ虫といふはうつくし。きりくすといふはからひたる也」(傍点筆者)とある。素龍は入むざんやなVの一句に「からび」を觀たものであろうか。或は

石山の石より白し秋の風

の句に「からび」を觀たものか。ともかく、芭蕉は、紀行文『おくのはそ道』への「からび」の評価を、「艶」の評価とともに、的確な評言として受け止めていたのである。それを明らかにする



この跋文である。

## 五

ここで、芭蕉の発句のうち、「からび」への志向が如実に窺えるものを列記しておく（先に考察の対象となつたものは除く）。

○枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

（『東日記』所収・延宝八年成）

○石枯て水しばめるや冬もなし

（右同）

○花みなかれてあはれをこぼすくさのたね

（『葉集』所収・貞享二年成）

○瘦ながらわりなき菊のつばみ哉

（『続虚栗』所収・貞享四年成）

○病雁の夜さむに落て旅ね哉

（『猿蓑』所収・元禄三年成）

○しぐるゝや田のあらかぶの黒む程

（『記念題』所収・元禄三年成）

○きり／＼すわすれ音になくこたつ哉

（『蕉翁全伝』所収・元禄三年成）

○雪ちるや穗屋の薄の刈残し

（『猿蓑』所収・元禄三年成）

○塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店

（『薦獅子集』所収・元禄五年成）

○いきながら一つに氷る海鼠哉

（『続別座敷』所収・元禄六年成）

○夜すがらや竹こほらするけさのしも

（眞蹟画讀・元禄年間成）

○旅に病で夢は枯野をかけ廻る

（『笈日記』所収・元禄七年成）

いずれも、「枯涸」の中に求められた美が芭蕉の慈しみを受けて語られている。就中、臨終吟へ旅に病でVの一句は、まさに芭蕉の「からび」を象徴する一句と言えよう。「枯野」は無論、一句成立（元禄七年十月八日）当時の季語（冬）ではある。が、「夢は枯野をかけ廻る」と続けられる時、そこには「枯野」に美を求めてやまない芭蕉が髣髴とするのである。「枯野」は、芭蕉の「からび」の理想郷としての「枯野」でもある。芭蕉の「夢」は、決してなく「枯野」を「かけ廻り」「からび」の美を追い求めたのであろう。

## 六

最後に、芭蕉の「からび」が、中興期の俳人達に於ても受け止められていたことを付記しておく。

木曾路ゆきていざとしよらむ秋ひとり

蕉村

一句のからびたるさまは、老杜が粉骨をさぐり、西行の山家に分入し芭蕉翁の口實ならんと申せしかば、先師もしかおもへりなど打あまれしが、滅後予に與へよとて、此句の下にみづからの像を置き置れし也。

几董著『新雑談集』（天明五年刊）である。几董が、蕉村の一句

に「からび」を見出し、その「からび」が、芭蕉からの流れであると指摘したのに対して、蕨村も賛意を表したというのである。彼等に於ても、「からび」は芭蕉の美（芭蕉翁の口質）の一つとして理解されていたのである。（了）昭46・5・27

※なお、芭蕉の美のうち、「さび」に関しては、芭蕉の「さび」の理解者——遅日庵杜哉の場合——（『近世文芸』18・昭45・7）  
「芭蕉の「さび」へのアプローチの爲の一試論——動詞「さぶ」の美的意味内容の検討——」（『近世文学論集——小説と俳諧——』昭46・5）、「しほり」に関しては「しほり」——「あはれ」の美的完成度として——（『文芸と批評』19号・昭43・7）、「ほそみ」に関しては、従来「ほそみ」解釈への疑問——許六の「ほそみ」論の再評価を中心に——（『文学語学』59号・昭46・3）

## 新刊紹介

近世文学史研究の会編

### 『増補下学集』

上巻・下巻・索引

早稲田大学図書館蔵本を底本とする、寛文九年刊の「増補下学集」が、「近世文学史研究の会」から先に、上・下二冊に分けて影印刊行され、その索引の刊行が待たれていた。ここに索引編の完成を見て、国語学研究者はもとより、中・近世文学を研究する者にも大なる益をもたらすことになった。「下学集」には、元和三年板と、それ

のそれぞれの拙稿を参照されたい。

※本稿を成すにあたり栗山理一先生の御教示をいただきました。記して感謝の意を表します。

### △追記▽

「瘦」を肯定的に把握しているものとして、『三体詩素隠抄』（元和八年刊）に於ける盧綸の「酬李端病中見寄」に対する「李端ハ素ヨリ清羸多病ナル人ナレバ瘦セ枯レテ、禪僧ノ姿ニ似タゾ、先ヅ姿ヨリ禪僧ニ似タホドニ、ヤガテ心モ枯木ノヤウニナリテ、枯禪トナラレンゾ」、嚴維の「酬劉員外見寄」に対する「コノ人ハ心ガ無欲ナルニ依ッテ、容モ清キゾ、然シテ、瘦セツカレタル人ゾ」の素隠のそれぞれの言が参考となる。

を増補した寛文九年板が知られているが、増補部分の語彙数の膨大なことは驚くほどである。紙幅の都合上、紹介は索引に限る。さて、見出し語の順序は、原本通りの仮名遣いによっているが、歴史的仮名遣いに基いてもよかつたのではないだろうか。また、仮名だけで見出し語をたててあるのは、日本語に同音異義の例が多いことを持出すまでもなく、例えば索引編の「イ」のように、原本にあたらなければとても判別できない場合も出てくる。これに関して

は、編者の間でも議論があったそうだが、一つの目安として漢字をあてた方が便利ないように思う。しかし、注文や、フリガナが

数種ある場合への細かい配慮が行届き、原本の仮名と、編者の付した仮名を、前者は片仮名、後者は平仮名で区別するなど、すこぶる使い易い。

更に、附録の「仮名字体一覧表」と、「元和本下学集」と「増補下学集」の該当部分との異同表は大層便利である。特に後者は、清濁・四つ仮名・開合・仮名遣いなどの研究に有益である。（なお御希望の方には桑山）（上巻・昭和四十二年十一月刊、一二三頁、一五〇〇円。下巻・昭和四十三年三月刊、二六〇頁、二〇〇〇円。索引・昭和四十六年四月刊、二九〇頁、七五〇〇円、共に文化書房博文社刊）（桑山俊彦）